



事前学習を終えた生徒の振り返りの一部

今日の学習を通して、東日本大震災ではどれだけ悲惨な出来事だったかを改めて知ることができました。副町長という立場で、ご自身も被災者でありながら、防災対策に関して被災者の方から心無い言葉を向けられたこともあるということを知りました。それでも、人々のために働き続けた遠藤さんは、それだけ、南三陸の町やそこに生きる人々を愛していたし、副町長という自分の責務を感じていたのだと思いました。「黒い壁が押し寄せる」状況はすごく怖かったはずですが、でも自分の「信念を貫く」ために戦っていたのかなと思いました。

自分の命が危険にさらされる中、防災対策室に残り続けた遠藤さんのことを知り、その決断をするという「生き方」のすごさを感じつつ、多くの疑問も浮かんできました。「仕事への責務」と「自分の命」を比べると、まずは、「命を優先」してしまおうと思います。なぜなら、そこに居続けることによって、遠藤さん自身の命が奪われてしまうことになりかねないからです。遠藤さん自身のご家族や大切な人を悲しませることになります。(防災対策室に残るということは、)僕には、思いもつかないような決断です。だからこそ、衝撃的でした。次回の ZOOM では、その当時の遠藤さんの思いなどを聞いてみたいと思います。

最後に、気仙沼の避難所で行われた卒業式の答辞の映像を見ました。



<答辞の一部>

自然の猛威の前には
人間の力はあまりにも無力で
わたくし達から大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには おごすぎるものでした。つらくて、悔しくて たまりません。
命の重さを知るには大きすぎる代償でした。
しかし、苦境にあっても 天を恨まず、運命に耐え助け合って生きていく事がこれからのわたくし達の使命です。

卒業式まで19日と迫った教室の中では、映像を見ながら涙をこらえている生徒もいました。事前学習を終えて、山本明依さんは、「“愛のともしび”の事前学習を終えて、19日後に行われる私たちの卒業式のことを考えていました。もうすぐ、9年間共に過ごしてきた仲間との別れが来ます。しかし、東日本大震災の当時、私たちとは違う心境で、“卒業”を迎えた中学生がいたことを知りました。とても悲しい気持ちになりました。私は、改めて、この仲間のことを大切だと感じました。この仲間と過ごせた時間が、『当たり前』だと思っていた日常が、『かけがえのないもの』であったことに気付かされました。」と学習を振り返りました。